

ユートピア

現場の夢とためいき

守 永 英 子

そして画面になるところを切りぬくというので、はきみをナイフのように使いながら押したり引いたりして切るのを手伝ったが、おとなの手にもかなりのかさである。そこへN子やM男が「何しての」「手伝ってあげる」と寄ってきて、いっしょに切りはじめる。次々に参加者が増して、箱のまわりはいっぱい。箱を切るのを手伝う人や、教師の助言で画面になる絵を書きはじめる人。そのうち全員がテレビ作りに夢中になって参加した。

いつも「わたしがやるからいいわ」と他を退けてトラブルを起こしがちなN子も、箱がかたくなかなか切れないので、素直に手伝いを受け入れたし、手に血が

三歳児のある冬の一日……
いつも一人で絵本をみたり、空箱で自動車を作ったりしているK男が「テレビを作る」というので、彼のイメージに合う箱をいっしょに探してあげる。彼が選んだのはかなり大きなダンボールの箱。

にじんだ時も「先生、血がでた！」と驚きの表情を示しただけで、作ることに気をとられていた。画面になる絵は二、三枚続きの筋のあるもの、一枚だけのもの、「電車がぶつかった」というニュース性のあるもの。そのうち空箱から切り

とって画用紙にはりつけ、「コマーションル」をつくるものもある。帰りぎわに、「みんなで作ったテレビ」をみせてあげた時の、かがやきにあふれた顔……。

短い半日の保育であったが、子どもたちの心にいきいきとしたかままりがあり、充実感があふれてくるのが感じられた。たまたま観察にきていた一学生が「三歳児がこんなに協力できるとは思いませんでした」と感動していたが、もちろんいつも三歳児がこんなに協力できるものではないし、教師がそれを望むことは危険ですらあると思う。年齢が小さければ、個々の活動を大切にしていあげることの方が、基本だと思われるからである。

ここで私が一番いいたいのは、その時の子どもたちの欲求をピタリと捉え、それと呼吸の合った助言、助力ができて、子どもの心がいきいきと動き、活動が発展してくるのを感じたとき、本当に保育の喜びがあるということなのである。それ

が肌で感じられ、自然と心が喜びにはずんでくるのである。

保育者として、いつもこういう保育がしたいと思う。しかし正直に言って、残念ながら心はずむような保育ができることは少ない。なぜなら、そのためには保育者が心身さわやかで、全神絳が、子どもの動きの中から小さなサインも見逃さずことのないほどはっきり目ざめていて、瞬間瞬間に、保育者の必要な動きをピタリと判断し、はつらつと動ける……そんな条件が保育者の側にととのつていなければできないと思えるからである。

わが夢多き園長先生はこうおっしゃる。……先生が、疲れたいやな顔で子どもの前にでてはいけませんよね……。本当に、心から私もそう思う。

確かに、疲れると子どもの動きを捉える視野が狭くなるのを感じるし、子どもの動きから保育に必要なサインを捉えるアンテナの機能がガタリとおちる。疲労

のひどいときは、子どもの動きさえ、負担に感じることがある。そのようなとき、保育者を支える唯一のものは、子どもが保育者に寄せている信頼感であり、期待である。これにこたえるために、保育者は努力を続ける。

通常八時半出勤、早く登園する子どもの世話をしながら、保育室をととのえる。子どもが一人でも登園してきた時から保育ははじまる。昼食時もむろん保育である。食後の休憩さえほとんどないに等しい。そして一時半に子どもを帰すと、すぐ保育のあと始末や掃除にかかると、つまり掃除がすむ二時半〜三時まで。は全くの休みなしである。出勤時間から、なんと六時間〜六時間半は、ほとんど動きづめということになる。そのあとは、事務的な整理や打合せや準備など……。勤務時間内には教材研究のための読書の時間もほとんどとれない。回復しきれない疲労が日に日にたまっていく。

ヨーロッパの幼稚園では子どもたちが

大変静かだと聞く。先日の新聞によれば西欧では幼稚園不足にもかかわらず十五人程度の定員を守るところが多いということである。日本の設置基準は四十人。個々の子どもを大切にしようとする保育者には、大変な負担である。

忙しいのも、疲れているのも、なにも保育者だけに限ったことではないといわれるかもしれない。たしかに世の中全体が、慌しい。

子どもは親のイメージに合わせて、ピアノに、バレエに、体操クラブに、そして年長児になれば入試準備に……とかりたてられる。

教師は、コグーイを、ピアジェを、才能教育を……と、なんでも知らなければと焦る。本当にこれでいいのだろうか。

自分も大きな慌しい流れの中に巻き込まれながら、ためいきをつく。忙しきの中に自分を見失い、ふと気がついたときには、ポロぞうきんのようになってしまうのではないかしら……と。